

論文審査の要旨

|   |                |    |      |
|---|----------------|----|------|
| 博士の専攻分野の名称  | 博 士 (教育学)      | 氏名 | 柴山 慧 |
| 学位授与の要件   | 学位規則第4条第1・2項該当 |    |      |
| <p>論 文 題 目</p> <p>高等専門学校における学生の創造性を育成する体育授業プログラムの開発<br/>         —教科の特色を生かした実践授業をもとに—</p>   |                |    |      |
| <p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 齊藤 一彦<br/>         審査委員 教授 沖原 謙<br/>         審査委員 教授 池島 良<br/>         審査委員 准教授 岩田 昌太郎</p>   |                |    |      |
| <p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、創造性教育を掲げる高等専門学校（以下、高専と表記）において、その体育授業の現状や課題、特色を明らかにしたうえで、高専の体育という教科の特色を生かした学生の創造性を育成する体育授業プログラムを開発することを目的とした。</p> <p>本論文は、序章と終章を含めて6つの章で構成されている。</p> <p>序章では、創造性とその教育に関して、創造性の概念、世界的な研究の動向や、日本におけるこれまでの研究を基に整理し、本論文での創造性の定義と、それに伴う創造性教育について明らかにした。</p> <p>第1章では、現在の高専における体育授業の現状と課題について把握するため、日本全国の高専体育教員への質問紙調査を行った。その結果、高専における体育授業は、高専が抱える制度的特徴が反映されていること、大学院修了者の体育教員が専門性を生かした授業を実施していること、女性教員が不足していること等の特徴が明らかとなった。</p> <p>第2章では、中国地方の高専における特色を生かした体育授業について明らかにするため、シラバス分析と、体育教員への高専の特色を生かした体育授業の実施や概要についてのヒアリング調査を実施した。その結果、高専の制度的特徴や物的かつ、人的資源を有効に活用した特色ある体育授業が実施されていることが示唆された。</p> <p>第3章では、これまでに得られた知見をもとに、高専の体育授業の特色を生かした創造性を育成する授業をH県のA高専で実践し、その成果を分析、考察した。その結果、本論文における授業実践は、学生の創造性の育成につながるということが示唆された。また、創造性に関連する資質・能力のうち、「臨機応変な思考や行動」と「リーダーシップ」は、体育授業だからこそ向上した可能性が考えられること、さらに「道具の活用や工夫」という創造性育成場面は、高専の体育授業だからこそ発現した可能性が考えられた。</p> <p>第4章では、本論文で得られた知見をもとに、学習者の創造性を育成する体育授業の基本的な考え方を整理した。そのうえで、体育授業で育成できる創造性の種類を基にしながら、高専と高校で実践が可能な学習者の創造性を育成する体育授業プログラムを開発した。具体的には、体育授業における創造性教育に必要な要素と育成可能な資質・能力を明示し</p> |                |    |      |

たうえで、高専における学生の創造性を育成する体育授業プログラムとして、アダプテッドスポーツを基にした授業プログラム、世界のマイナースポーツの認知度向上という課題解決を含んだ授業プログラムを開発した。また、高校における生徒の創造性を育成するプログラムでは、クラスの体力や健康に関する課題を解決する体づくり運動を創造するというプログラム、ソフトボールのバッティング動作の習得作業における創意工夫に注目して、その技能向上を目的としたプログラムを開発した。

終章では、本論文の成果と意義について述べたうえで、今後の創造性教育への展望について言及した。まず、欧米における体育授業に関する創造性教育と比較した場合、実証的研究での事例の蓄積という点で、この分野における研究の進展に寄与できたと考えられる。特に、本論文で実践された学習者が新しいスポーツを考案したり、既存のスポーツを改善したりする学習も有効であることを新しく提示することができた。また、本研究の背景の1つであった、現在の日本の創造性教育が世界と比べて遅れをとっているという現状について、本論文は、その解決に貢献し得る成果をあげたと考えられる。先行研究では、日本の創造性教育の課題は、教師も学習者も創造性に対する理解が不十分であることを指摘されている。この点について、本論文では、授業を実施するに際して、教師が持つ創造性に対する定義や理解、学習者が創造性を理解するための具体的な手法を含めて示すことができた。最後に、産業界への人材育成が求められる高専という視点から、「道具の活用や工夫」という高専の体育授業独自の創造性発現場面を生かして、企業等で活用できる体育を通じた創造性を育成するプログラム開発へとつながる可能性について言及した。

本論文は、以下の点で高く評価できる。

- (1) 時代や社会環境によって影響され、一定の定義を持たない創造性という概念について、現代社会に沿った定義づけをし、創造性教育についても同様に示すことができた。
- (2) 直近20年間で明らかにされてこなかった高専の体育授業の現状について、全国規模での調査を実施したうえで、それを明らかにしたこと。また、中国地方の高専を対象とした調査によって、高専における体育授業の特色の示唆を得たこと。
- (3) これまでの先行研究で取り扱われてきたダンスや器械運動以外の体育授業によって、学習者の創造性を向上させる実践を行ったこと。また、その分析過程においても、先行研究よりも詳細な方法を用いており、創造性の向上だけでなく、体育授業だからこそ育成できる創造性に関連する資質・能力を明らかにし、授業のどのような場面で創造性が育成されるのかの示唆を得たこと。
- (4) 体育授業における創造性教育で必要な要素と育成可能な資質・能力を明示したうえで、学習者の創造性を育成する体育授業プログラムを、高専と高校を対象に開発したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和3年2月9日